

「天下の春」



財務副大臣

古川 禎久

中国の古い漢詩に『一花開いて天下春なり』という一節がある。寒い冬に野を歩いていると、ふと一輪の梅花が目にとまった。おやっと思ってあたりを見回すと、なんと、そこはもう春の気配でいっぱいであったよ…というところだろうか。

禅語においては、『花開いて天下の春』となる。この場合の花は梅に限らない。桜でもよいし菊でもよい。道端に咲いている名もない雑草の花でもよいのだ。そしてこの花は誰かに褒めてもらおうと思って咲いているのではない。世間から尊敬されたくて咲いているわけでもない。花はただ花として花を全うしようと咲くのみである。ひたすらに、ひたむきに咲く姿をして、人もまたかく生きるべきだと禅は教える。人は弱いもので、やはりどうしても他人の眼が気になって仕方がない。世間の評価などにとわられず、自ら信じるところを行うことができれば、それはすなわち満天下の春と呼ぶべき清々しさである。

ところで、私は以前、ある体験を通じて、「自ら矢面に立つこと」「憎まれ役を買って出ること」の苦しさや辛さを身をもって知ることがあった。威勢よくものを言うのは簡単である。だが実際に行うとなると世間からの総攻撃を覚悟しなければならない。身を斬られる痛みにジッと耐えなければならない。内心はトホホ…でも言い訳はできないのだ。しかし元来、責任をもって仕事をするとはそういうことである。立場が重くなればなるほどその種の場面が増えるのもまた当然のこと。人は責任を果たすには、すすんで憎まれ役も買って出なきゃならんし、批判の矢面にも立たなきゃならん、そんな勇気が要るということだ。

私は今、財務副大臣として、財務省のみなさんと一緒に仕事をさせて頂いている。そして間近なところで、財務省の諸兄の働きっぷりを見せて頂いている。とにかく憎まれがちな財務省ではある。だが世間の悪口をもものともせず、国のために責任を全うしようとする諸兄の姿勢は立派である。黙々と、ひたすらに咲く花は清々しい。